

# 毎日が 縁日のようだった

なつの下町物語

杉原せつ著

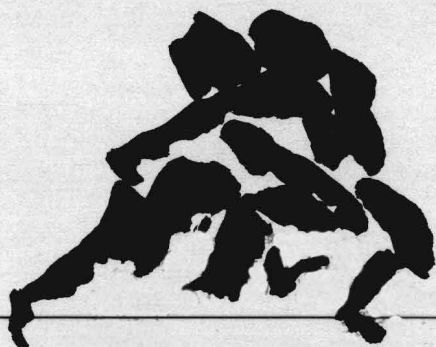


日本エディタースクール出版部

# 毎日が 縁日のようだった

なつの下町物語

杉原せつ著



日本エディタースクール出版部

杉原せつ(すぎはら・せつ)

東京日本橋蠣殻町生まれ。

記録映画脚本・演出。

主な映画作品、

「4500人の陽気な女房たち」

「冬の日 ごごのこと」

「生まれる」「ともだち」

「地球のたべもの」「<sup>ゼロ</sup>0の発見」

「車椅子の進む町」

他に絵本、

「こいぬ」「うごくえ」「ポケとポロ」(いずれも福音館書店)などがある。

毎日が縁日のようだった なつの下町物語

---

1993年10月22日 第1刷発行

著 者 杉 原 せ つ

発 行 者 吉 田 公 彦

発 行 所 日本エディタースクール出版部

〒101 東京都千代田区三崎町2-4-6

電 話 東京(03)3263-5892

FAX 東京(03)3263-5893

---

© 杉原せつ 1993

三秀舎印刷・桂川製本

ISBN4-88888-209-6

毎日が縁日のようだった——目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

|   |              |    |
|---|--------------|----|
| 一 | 日本橋蠣殻町       | 一  |
| 二 | メンコやベイゴマ     | 三  |
| 三 | 商売のおじさんたち    | 四  |
| 四 | 馴染みのお店屋      | 九  |
| 五 | 弟の仇討ち        | 二五 |
| 六 | 菖蒲湯の日        | 三五 |
| 七 | 墨田川の花火       | 三三 |
| 八 | わんぱくっ子たちの夏休み | 四一 |
| 九 | ほうきの三味線      | 六一 |
| 十 | 活動写真と大人の世界   | 七三 |

# 目次

|    |            |     |
|----|------------|-----|
| 十一 | 川に落ちたお仕置き  | 二八  |
| 十二 | 子どもお神輿     | 三二  |
| 十三 | お餅つきの手伝い   | 三五  |
| 十四 | タドンづくり     | 三九  |
| 十五 | 慌しい大晦日     | 四九  |
| 十六 | お正月の無礼構    | 七一  |
| 十七 | 初 荷        | 七   |
| 十八 | ポンポン蒸気に乗って | 一〇五 |

各章の扉の挿画 松川八洲雄

本文中のカット 著者

見返しの図 「大東京鳥瞰図」(一九二一年、部分) 東京都立中央図書館蔵

一

日本橋蠣殻町



27

## なつの誕生

隅田川が東京湾に入る手前、新大橋のかかる今の中央区浜町付近で本流から西に別れる一本の支流があった。この川は中央区の西南部を走りやがて本流の隅田川と同じく東京湾に注いだ。

この支流に沿った浜町の隣り町、蠣殻町かきがらちょうになつは生まれた。当時の住所名は「東京市日本橋区蠣殻町一丁目四番地」だった。対岸には中洲、箱崎町、新川などがある。蠣殻町から奥（西北）に入ると人形町、富沢町、堀留町、大伝馬町、小伝馬町、横山町、そして西に本町、南には兜町、茅場町、八丁堀、新富町などの町々が続き、なつの生まれ故郷「蠣殻町」を取り囲んでいた。

これらの町の多くには、呉服、綿、糸、葉、瀬戸物、材木、海苔、鰹節、鶏卵、酒、紙等を扱った問屋の大店おおだながぎっしりと軒をつらねていた。なつの生まれた蠣殻町の川岸には回漕問屋が多く、川岸から奥に入ったところには瀬戸物問屋と大きな倉庫が建ち並び昼間は人々の活気で賑やいでいた。

なつの家は、明治時代からこの地にあった回漕問屋で、右隣りには大きな酒問屋の升屋があり、続いて米屋の田畑さんの家、横丁を一つ隔てたところにはヤマサ醤油の東京店があった。ヤマサ醤油は、木造建築ではあったが、この頃の下町には珍しい緑色をした明治風洋館といったしやれた建物であった。近所の人たちが、何かの記念写真を撮る時などよくこの建物を背景に使っていた。

右隣りの方には炭屋の大山さん、米屋の佐藤さん、回漕問屋の銚子屋さん、紙問屋の川口さん、角には朝鮮人のクス屋さん一家、横丁を隔てて三軒目におじいさん、おばあさんの営むお菓子屋さん、そのお隣りが瀬戸物屋、次は回漕店……といった具合に表通りから裏通りまで平屋、二階建ての建物がいりまじって肩をよせ合うように並んでいた。

なつの育った家は、元は質屋だった家を父親の芳郎が浅草花川戸にある本店から分かれてここに移り住む時ゆずり受けたもので、台所を出て渡り板を渡った裏には、大きな立派なお蔵がついていた。このお蔵がやがてなつや近所の悪童たちにとって縁りの深いものとなっていく。

この川岸にある回漕問屋の多くは、主に、千葉、茨城方面に荷の取引先を持っていた。

なつの家は家号を「山仁回漕店」と呼び、やはりこの業者仲間の一軒であった。

店前の川岸から和船や蒸気船に、各問屋から運ばれた呉服、脱脂綿、食品かん詰、ビン詰薬品、砂糖、醬油空ビン、雜貨等々の荷積みをする。荷物類は季節によってその種類や量は異なるが、年間通して定まった荷の品種は多い。蒸気船は、時に荷を満載した和船二、三艘を引船としてつけて出帆する。船は一度東京湾に出て、そこから江戸川に入り、運河を渡って利根川へと進む。そして千葉県の佐原、小見川、笹川、銚子とまわり、それぞれの場所に一旦荷降ろしをする。荷降ろしが終わると、さらに、対岸の茨城県波崎、竜ヶ崎等にまわる。帰りには、また、これらの先から米、野菜、鶏卵、ヤマサ、ヒゲタ醬油等の積荷をして東京へ戻る。

千葉方面から運航される荷の中で、醬油の量は特に多い。その醬油は、東京で消費された後、空ビンとなって、東京から再び千葉方面へ運び戻されることになる。

なつは、ポンポンポンと、早朝の空気を破って出帆してゆく蒸気船の音を夢うつつの中に聞きながら、幼い日々の朝を迎えた。

冬は、たくさんのゆりかもめが、この蒸気船の吐き出すポンポンポンという音に負けまいとでもするかのように、キーイ、キーイ、キーイ、と、かん高い声をあげながら川面を飛びかっていた。蒸気船の小さな煙突から吐き出されるやわらかくまるやかな音と、ゆりかもめの喉をさいて出るような張りつめた鳴き声が、妙な不協和音を奏でながら冬の川面を渡っていった。

なつは、二人の姉たちと一緒に、朝もやの中のこうした冬景色を、寝巻の衿をかき合せながら、寝ぼけまなこで、よく二階の窓から眺めていた。

なつは六人姉弟の三番目として生まれた。

当時、女の子は家族の中で色彩的、実用的存在ということではほどほどにその誕生を歓迎された。しかし、それも三人目ともなるとどうだろう。親の期待としては、今度こそ男の子をと願うのが当然となる。しかし、そうした切なる親の期待に反して登場してしまったのがなつだった。これが男の子と見間違うばかりの女の子で、色は黒く、目はつりあがり、ギュツと結んだ口許は、押しあけ

てもあかないような真一文字型、そして、髪のはふさふさと黒々と延びに延びて目を覆うばかりという容貌だった。後日、なつが成長してからよく母親のふさが当時を想い出すように語った。

「私の隣りに寝ているなつちゃんのお顔をしみじみ見ながら考えたものよ、まあ女の子だということにこんな男の子みたいな立派な顔していばつちまつて……、末はどうなることやら……とねえ」

母親も、三番目の子となると、もう、育児なれして子育てにそう神経をピリピリさせることも少ない。長女のはるの時は周囲に気づかいて栄養も充分にとれずにひよわな子が生まれてしまった。次女あきの時は、これにこりて栄養を摂り過ぎて、そのせいか生まれてからよくおできが出来て困った。なつの時は、塩梅がうまくいったのか、母乳もよく出たし、生まれながら丈夫で余り骨も折らずにすくすく育ち母親にとってはとても楽な子であった。したがって、自然なつは両親の庇護を過大に受けることもなく、放れ駒のように自由な世界を近所の悪童たちと共に飛びまわり、幼児期、学童期を遊びの中に堪能した。

しかし、物事をすべて食欲に吸収しながら成長してゆくこの時期に、自由があるということだけで心が満足する筈はない。子どもたちの物に対する欲望は、親が考えるほど単純でないことは今も昔も変わらない。にもかかわらずなつの場合、まず衣類はほとんど二人の姉たちのお古で間に合わされた。玩具、文具、その他すべてこれに準ずる。それも、なつが三女という、両親から特別新しいものを買う必要性を認めてもらえない順位にいたわけだから止むを得ないことだった。

なつの母親のふさという人は、特に手先が器用で、このふさの手にかかったらどんな古着でも、お人形のこわれでも、まるで魔法使いの手にでもかけたようにたちまち新品同様に生まれ変わってしまった。だから、ふさにしてみれば、三女であるなつに対し特に差別する意識など毛頭なく、自分の手で古いものを綺麗に仕立直したり、修理したり、残り布や小布こぎれを利用してお人形、お手玉、きんちゃくをはじめとする様々な袋物などを作っては、それを新しく買った物と同じ価値観で、あるいは「それ以上の物」という感覚でなつに与えていたのだ。

ふさの立場からすれば、作る素材は十二分にあるのだからそれをさらに十二分に生かしさえすればよいことで、特に新品を買い求める必要はどこにもなかった。そして、そのことは至極く当たり前のことだった。当時は、現在のように物がみだりに溢れて人間を圧するような状況はない。庶民は生活の最低必需品があればそれでよしとした。いわば今の言葉を借りればシンプルライフそのものを実践していた時代である。

しかし、なつは、やはり自分の気に入ったものを新しく買ってもらって着てみたかった。そして、あのおもちやも、この文具も本も、あれもこれも、と周囲には買って欲しいと思うものだらけだった。それが姉たちに比べて意のままにならない。それに加えて弟の誕生が眼の前に出現したことによって、さらに、日頃から抱いていた妬ねたましき、口惜しさが、まるで火に油を注ぐ譬たとえのように大きく心のうちに燃えひろがっていった。

弟の光太郎は、なつが五歳の時に誕生した。それまで長女はる、次女あき、三女なつと女の子ばかり、三人続いた両親にとって、四人目で初めて男の子を授かったということは、掌中に輝く玉を得たような喜びであった。なつは、それ以後日を追うごとに、この弟と自分とに対する親の対応のしかたが少し違うのではないかということに次第に気づきはじめ、幼い心はそこはかとなくゆれていった。

長男にかける親たちの溺愛――。

なつは、ひとり爆発する。

### 箱崎尋常小学校

なつが生まれてはじめて箱崎尋常小学校の校門をくぐったのは、数え年八歳の四月一日であった。その年、姉のはるは立教高等女学校の三年生、あきは小学校五年にそれぞれ進級した。

入学式の当日、なつは、組立式の鏡の前に座らされ、ふさに念入りにくせ直して髪を整えてもらった上で、七・三に分けた髪を耳の上で一つゴム紐で結わえ、後で二つに分け、二本の三つ編みのお下げ髪に結ってもらった。髪の手が多かったなつのお下げは、二つに分けた一本がちょうど、普通の子の一本にしたのと同じ位のものであった。

髪が結い上がると銘仙の元禄袖の着物に、えび茶色の袴をはき、着物とおついの羽織りをはおった。

この着物と羽織りのおついの銘仙は、濃いオリブ色の紬織風の地に、オレンジ、白、紫、青などの色合いの緋模様かすりもようが調合よく浮き出ていた。なつの年齢にしては少し地味気味だったが、なつ自身はとても気に入っていて、かなり大きくなるまで着ていた。色黒で、少々きつめの顔立ちをしたなつには、花柄のものよりも、どちらかといえばこうした緋風のものの方が、はた目にもよく似合うように見えた。

「行つて参ります」となつはふさに挨拶をして、父親の芳郎に連れられ入学式に出席するために、家を出た。それからのなつは緊張の連続で、学校の講堂に落ち着くまでは、あたりなどに気を配る余裕もなかった。講堂で、ニコニコとした校長先生のお話を聞くうち、やっと、我に返ったように自分を取り戻し、本当に学校に上がったのだという実感が湧いてきて、何となく胸が高鳴ってきた。やがて、担任の先生が紹介されて、なつたちは、その先生の後について、これから毎日勉強するようになる自分たちの教室に入ってしまった。先生の名は大松先生といって男の先生だった。背は中位で、頭はぼうず刈り、鼻の下にはチョビひげをはやしていた。

先生は、講堂から教室に入るまでずっと優しい笑顔で生徒たちを引率していたが、生徒たちの方は、誰もの顔が終始緊張に引きつったままだった。しかし、教室に一步入ってしまうと、講堂よりはるかに狭い空間にほっと安堵したのか、みんなの表情は次第にほぐれていった。なつも、普段見慣れた友だちの大介の妹の育子や、強の妹の文子、それに米屋の優子の弟の勢太郎たちが、同級生として目の前にいるということで、やっと心が落ち着き、思わずお互い顔を見合せてほほえみ合

うまになつた。

この時のなつのクラスは、男生徒と女生徒と合わせて四十二名であつた。この頃は、普通、男生徒と女生徒とは別のクラスに分かれている場合が多く、なつのクラスのような例は珍らしかつた。当時はこういうクラスを男女組と呼んでいた。

教室の中には、二人並びの机が四列に並び、その机の左と右の端上には、生徒たちの名前が、細長い白い紙に墨で書いて貼つてあつた。文字は、カタカナで書いてあつたので、すでに字の読める子が、前列にあつた自分の名前をいち早く見つけ、その方にかけていった。そして「うわー、これ、おれの机だあ」と、机の隅の自分の名前に顔を近づけ目を輝かせて見つめた。すると、次から次と、入口の方から字の読める他の子たちが教室の中の自分の机を探しはじめた。この頃は、家に自分の机など持っている子は、先ずいなかったので、自分の名前のついた自分の机があるなんて、まるで夢のような気がしたに違いなかつた。しかし、一方、字の読めない子たちの方は、自分の机を探すにも探しようもなく、ただあつ氣にとられてぼんやりと、はしゃぐ方の生徒たちの様子を眺めているだけだつた。なつも、この中の一人だつた。

なつは、入学式の日まで、家の者からも、他の誰からも、文字などというものを教わつたことはなかつたし、また、関心を持つ機会すらもなかつた。従つて、カタカナは勿論のこと、恐らく、数字の「1」すら知らなかつた。なつにとつて、この日、字をすでに知つていた子が同じ年の子の中にいたということは晴天の霹靂のような出来事で、この時のショックと屈辱感は計り知れないもの

があつた。

入学式を終えて、すぐ帰ってしまった芳郎やその他の僅かの父兄を除いて、後に残つた大部分の父兄たちは、教室の後の方に立つて、自分たちの子どもを見守つていた。

先生は、はしゃぐ生徒たちをまた一カ所に集め、席に着かせるために、廊下よりの窓際に、一人の名前を読み上げながら一列に並ばせた。そして、前列から順に席に着かせた。なつの席は、四列の真ん中の列で、また、前からも後からもちょうど中頃にあつた。なつと同じ机に並んだ隣の女の子は、なつの知らない顔の子であつた。この子が、後に、なつのおしゃれ心をかりたてる対象になろうとは、なつ自身気付きようもなかった。何しろ、自分の名前の書かれた机に向かつて腰かけてからのなつというものは、気もそぞろ、ただ、教壇に立つ先生の話に耳をそばだて、じつとその顔を見つめているばかりで、他のものなど何も目にはうつらなかつたのだから。

この日、学校から家に戻つたなつは、先に帰ってしまった父親の芳郎をつかまえ、真つ先に抗議した。なぜ他の父兄のように終わりまで残ってくれなかつたのか、もし、残っていれば、教室に入つた時、字の読める子が一杯いて、自分のように字が読めない子は、とても恥ずかしい思いをしたということがよく解つた筈なのに……と、不満々訴えた。しかし、芳郎は「そういうことを習うところが学校じゃないか、今日上がったばかりで字なんか読める道理がないだろう、忙しいんだ、さあ、奥に行つて、行つて……」と、なつの訴えなど、まともに取りあおうとしなかつた。なつ

は、この日一日、何とも情けない思いをして過ごしたが、翌日から引き続いて毎日学校へ通うようになってからは、そんな思いもケロッとどこかへ吹き飛んでしまった。

何しろ、学校へ行けば、その間は、少なくとも、両親から家の用事を言いつけられないで済むし、叱られることもないし、そして、新しい大勢の同じ年の友だちとも遊ぶことも出来るし……等、なつにとって家から離れた学校という別世界は、こうしたこと一つとっても最高の場となった。しかし、それにも増して、なつを有頂天にさせたものは、学校で受けるすべての授業を通して「学ぶ」という体験を得る機会に出合えたことだった。これは、なつにとって、生まれてはじめての感動の体験であった。

文字を知り、文章を読み、新しい言葉を学び、数字を覚え、少しずつ複雑な計算を可能にし、クレヨンを持ち、画用紙に向かって形を描き、色をほどこし、あるいは、ハサミを持ち、色紙を切り、自分の世界を造形化してゆく、そしてまた、歌と遊戯で自分の体を操りながら自在に表現出来る世界のあることも知っていった。こうして、学校生活における魅力は、なつの日々に新たな興奮を呼び起こさせるのに十二分のものを持っていた。

授業は、ほとんどの学課を担任の大松先生が教えたが、図画、唱歌、体操だけは、それぞれの専門の先生が受け持った。

なつは、入学以来とりわけ深く「物語」の世界に興味を持つようになった。そのきっかけを与え